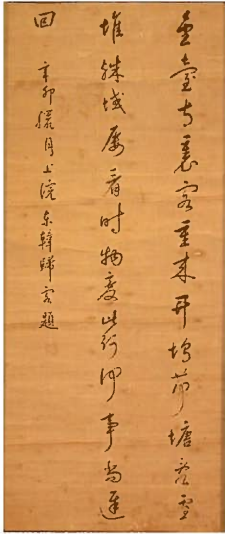
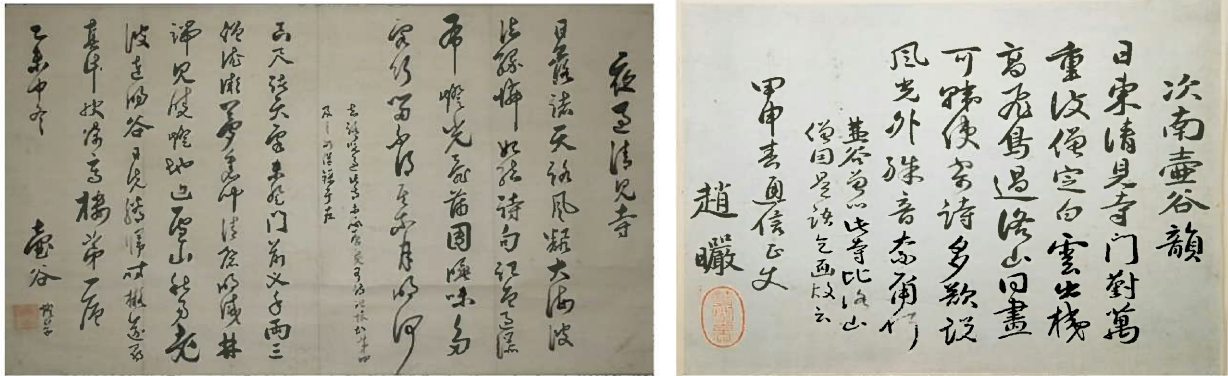


○ 日本側所蔵記録

資料番号	J. III-5	資料名	朝鮮通信使従事官李邦彦詩書
			
<p>紙本墨書（縦×横）151.5×61.2cm</p>			
<p>本願寺八幡別院はかつて金台寺と呼ばれ、朝鮮通信使来日の際には正使・副使・従事官の三使の昼食休憩所となった寺である。本資料は、1711年に来日した第8次通信使の従事官・李邦彦がこの寺に贈った七言絶句の漢詩。江戸での国書交換の任を終え、帰路の途中で祖国に対する望郷の念を綴ったもの。</p>			

資料番号	J. III-6	資料名	清見寺朝鮮通信使関係資料
			
<p>まくり、掛幅、屏風 紙本墨書〔縦×横〕55.6×91.0cmほか</p>			
<p>静岡市の東海道沿いにある清見寺は、1607年と1624年の朝鮮通信使の宿泊場所となったほか、1617年と1811年の使行を除いて、道中の休息所などとして利用された。清見寺から眺める富士山は絶景であることから、各使行の通信使はここでの詩作を楽しみとし慣例化した。</p> <p>そのため、現在も清見寺には三使や随員の詩、関連資料が数多く遺されており、まくりのほか、掛幅や屏風に仕立てられているものもある。また、これらの詩作の多くは、1655年の従事官であった南龍翼(号・壺谷)の詩の韻を踏襲しているものが多い。</p> <p>これらの詩作は、日本の学者に文化的な影響を及ぼすとともに、富士山の絶景に感動した朝鮮通信使の様子を知ることができる。</p>			